

1 中学校歴史的分野における社会認識形成を通じた市民的資質育成の在り方について

2 一 高山右近(日本の中世から近世への移行期)を題材として 一

3
4 坂田元文(富山大学大学院・富山大学附属中学校現職派遣)

5
6 【キーワード】中学校歴史的分野, 価値判断, 選択の基準, 近世移行期, 高山右近

7 1. 問題の所在

(1) 社会認識形成を通じた市民的資質育成

社会科は「科学的社会認識形成を通して、市民的資質を育成する」とある。社会認識は価値認識と事実認識が重層的に捉えられており、知識-概念-価値を構造的に捉える研究成果がある。この社会認識形成をもとに社会的に判断し、公共的な事柄に自ら参画することが市民的資質の育成へとつながっている。このことについて研究した実践は現に多く存在している。一方、中学校社会科において、価値判断を迫る授業実践は散見されるものの、その多くは公民的分野のものがほとんどであり、地理的分野・歴史的分野においてはそれに比較して少ないと言わざるを得ない。元来、価値判断を地理的分野・歴史的分野で実践するのは難しいと言われてきたし、価値判断はそぐわないと言われたこともある。実際、地理・歴史両分野の実践では知識-概念の事実認識に関する実践報告が多いように思う。

しかし、地理・歴史・公民的分野の3つが揃ってこそその中学校社会科であるとするならば、公民的分野以外でも価値判断を迫る授業実践はできないかと筆者は考えるようになり、本研究を行うに至った。

2. 研究仮説と検証方法

(1) 研究仮説

- ①価値判断場面を設定した学習課題に対し、討論という学習形態は効果的である。
- ②価値基準として「選択の基準」を設定すると討論における価値判断が有効に行える。

なぜ地理的分野・歴史的分野で価値判断を行うことが少ないかとするならば、学習課題において両分野とも「どのような、どのように」といった問いや「なぜ」といった問いに対して既成の事実やそこから構成される概念

を捉えるものにとどまっているからであり、新たに「～すべきか、否か」「～はよいことか、否か」といった判断を迫る学習課題が構成しにくいということが挙げられる。

そこで、地理・歴史的分野において「どうすべきか」「よいことなのか」といった課題が生じるような教材開発や単元開発をするとともに、学習形態として「ディベート的な討論」(以下、討論)を取り入れる。

討論は学習者が自分の立場と相手の立場との共通点や相違点について比較・分類することが可能であり、異なる視点や価値観に気付くことができる。また、自分の見方考え方を根拠付けるものに留意したり、同じ根拠であっても違う解釈が成り立つことに気付いたりすることができる。このことから討論を授業に取り入れることで価値判断力を育むことが期待できると考えた。

また、公民的分野において生徒は生活経験や既習事項から価値に基づいて判断することができるが、地理・歴史的分野においては価値判断するための価値が基準として必要となると考え、その基準となる価値を「選択の基準」として授業では位置付け、それを論点に討論を行うこととした。

(2) 検証方法

①歴史的分野における価値判断場面の工夫

社会認識形成を通して、市民的資質を育成するための合理的判断を行うには、価値判断する場面が必要である。歴史的分野における「・・・時代とは～～という時代であった」などの概念的な知識を土台に価値判断を行い、「～すればよい」といったような合理的判断を迫る場面を学習課題として設定する。

②歴史的分野における課題設定の工夫

歴史はすでに起こってしまった事実を検証したり、解釈したりする分野であるので、合

理的判断を迫る場合は、仮想場面を設定し、歴史的 facts に縛られないようにすることが大切であると考え。今回は仮想の人物を扱い、生徒をその時代の人物に仮託させることで、
75 より主体的に課題を追究する姿が期待できる。

③ワークシート(学習カード)の工夫

「ツールミン・モデル」を活かしたワークシートを用いることで、確かな根拠をもとに考えることができる。選択【トレードオフ】
80 したこととその理由【インセンティブ】を、選択によって得られるもの【便益】と失うもの【機会費用】に分類しながら記述できるようにした。そうすることで、自分の思考・判断したことを整理しながら、見方・考え方を表現することが期待できる。
85

④評価問題の工夫

評価問題では、授業では扱っていない資料と問いを用意して、社会認識形成および市民的資質育成に関わる思考・判断・表現力等を
90 評価しようとした。(2問中1問を下記に例示)

真田氏は豊臣政権の下で領地を維持することができた。資料を見て、真田氏の当主がこの頃に行ったと推測できるものを、選択肢から選びさい。

3. 授業の実際

(1) 人が行う「選択」

アルバート・ハーシュマンによれば、人間
95 が社会に不満足な場合、意識的な対応として①体制に従う、②抵抗する・文句を言う③退出すると挙げており、意識的でない対応では弾み・偶然などを挙げています。また、①～③以外に④やり過ごす、無力化するなどの方法
100 もあるとされている。

(2) 近世移行期の高山右近の「選択」

高山右近は織田信長・豊臣秀吉・徳川家康と同じ時代を生き、彼らとの関わりも深かった。キリスト教を信仰し、黒田孝高をはじめ
105 とする多くのキリシタン大名の嚆矢であった。2015(平成27)年高山右近没後400年には、ローマカトリック教会により、聖者につぐ称号の「福者」に認定された。一方で、千利休の弟子の「利休七哲」として当時大成された侘
110 び茶の名人として全国的な名声も誇っていた。また、金沢城や高岡城の築城を推進したと伝

わる戦術家であり、1588年から1614年の約26年に亘り、加賀前田家の客将として生きた戦国の武人でもあった。近世「移行期」を生きた高山右近の生い立ちをモデルにした仮想の人物を扱うことで、中世から近世、安土桃山時代から江戸時代の時代の転換のようすや、それぞれの時代の特色をとらえることができると考え、授業を構成した。

120 (3) 実験授業

課題：仮想武士高佐源丞右衛門(高山右近)は禁教令に対し、どうすればよいだろうか。

「生い立ち」から考えられる『選択の基準』

- ①主君への忠義に篤く、武功を挙げている。
- ②キリスト教を信仰し、布教に熱心である。
- ③父母や妻子などの家族を大切にしている。
- ④高山家という家の維持を大切にしている。
- ⑤心静かな茶の湯の精神を大切にしている。

『選択の基準』が、仮想武士のモデルである「高山右近の生い立ちから解釈した見方・考え方」であることを想起させ、判断の妥当性の
125 検証を行うための話し合いを行う。

A案：キリシタン大名と共に家康に武力抵抗【理由付け】…信仰を維持するために抵抗・幕府はまだ盤石ではない。団結して戦えば言い分を通すことができるかもしれない。・キリスト教を捨てるぐらいなら、団結して殉教するつもりで武士として戦えばよい。

B案：キリシタンとして海外の日本町に移住【理由付け】…信仰を維持するが抵抗せず・キリスト教を信じていることができないのであれば、日本町で信仰を続ける方がよい。・幕府に反逆しても、家を滅亡に招くことになり、忠義を果たしたことはない。

C案：棄教して徳川幕府の大名として生きる【理由付け】…信仰を維持せずに臣従する・信長や秀吉に従ってきたが、家康は関ヶ原で勝利し、強大であるので逆らえない。・茶人や築城技術者としての地位を築いているので、文化人として生きていけばよい。

【参考文献】

溝口和宏「市民的資質育成のための歴史内容編成「価値研究」としての歴史カリキュラム」
130 全国社会科教育学会『社会科研究』(53)2000